

よって価値の高い実証データを提示し、「内在的な視点」から都市内部の階層化やIS経済のダイナミズムを論じる意義を打ち出すことに成功していることは間違いない。データや事例が語ることから実のある理論を紡ぐという著者の姿勢には深く共感するし、学ぶことも多かった。本書は実証研究の底力を知ることのできる研究書であるだろう。

金子守恵、『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂、2011年、viii+287p.+xii.

木村大治\*

表題に明快に示されているように、本書はエチオピアにおける土器製作の民族誌的記述である。エチオピア南西部に住む民族集団アリは、農耕活動をおこなう人々「カンツァ」と、物作りをおこなう職能集団「マナ」に二分されるが、本書は「マナ」の内の土器作り集団「ティラマナ」を対象としている。土器作りをおこなうのは、もっぱら女性である。製作は個人単位でおこなわれ、できた土器は定期市に持って行って売られる。このように高度な産業化に至らず、社会に埋め込まれる形でゆったりとおこなわれている物作りを、本書では「地縁技術」と呼んでいる。

著者・金子守恵氏は、1998年からアリの土器作りの調査をおこなっている。本書はその調査の成果として2005年に提出された博

士論文がベースになっている。それではまず、目次から本書の内容をみてみたい。

はじめに 一どのように土器をつくっているのか?—

第一章 土器をつくる身体と生活のなか  
いきる土器 第一節 ものづくりをめぐる研究 第二節 研究目的と方法  
第三節 調査地概要

第二章 つかう 第一節 土器のつかい方  
と所有個数 第二節 土器の分類・命名  
第三節 一部の世帯で所有されている土器  
第四節 土器の購入 第五節 創りだされる土器の種類

第三章 つくる 第一節 粘土の採取から、  
成形、焼成まで 第二節 土器の成形過程—  
「指使い」による成形過程の記述  
第三節 成形過程の比較 第四節 土器をつくる身体

第四章 知る 第一節 技法の獲得と土器  
づくりを知っていく状況 第二節 土器  
づくりを知っていく—三年間の記録  
第三節 土器づくりを知っていく過程—  
SとG村の一二人の娘の事例 第四節 ま  
とめと考察

第五章 かわる 第一節 結婚と土器つく  
り 第二節 職人のライフヒストリー  
と土器づくりの変遷 第三節 職人の  
テクノ・ライフヒストリー 第四節  
テクノ・ライフヒストリー—人生の軌  
跡に技術の変化を跡づける試み

第六章 うる、創る 第一節 生業として  
の土器づくり 第二節 土器をめぐる

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

評価の仕方 第三節 新しい種類の土器が創りだされる過程 第四節 土器の態

第七章 地縁技術としての土器づくり 第一節 地縁技術としての土器づくり 第二節 職人によって文脈化される土器づくりの過程

このように本書では、アリ社会における土器の種類とその使い方、作り方、ライフヒストリーに沿った技法の習得過程、新しい形態の創造といったトピックが語られ、最後に「地縁技術」「文脈化」という概念によって全体のまとめが試みられている。

本書の最大の特徴は、ティラマナにおける土器製作のプロセスが、一貫して職人の「身体技法」という視点から語られていることだろう。以下、まずこの点について書いてみたい。よく知られているように、身体技法 (techniques du corps; techniques of the body) とはフランスの人類学者マルセル・モースの提唱した概念で、著者によると「人が伝統的な様態で身体を用いること (p. 9)」とされる。つまりそれは、歩き方、泳ぎ方、あるいは本書の対象となっている土器を作るやり方といった、およそ人間が身体を用いておこなうあらゆる習慣的行為に対して用いられる概念である。この概念が人類学的な記述において重要であり、また有効であることは言を待たないが、それを議論の前口上としてだけ使うのではなく、具体的に言語化して記述し分析するのは、実際は容易なことではない。本書でおこなわれているのは、その困難への挑

戦であるといつてよいだろう。

著者はアリの村に住み込んで、女性職人たちの土器作りを徹底的に観察し、また自ら土器作りの習得を試みる。その過程で、身体動作の記述の単位として「指使い」という概念が持ち込まれる。著者によると「手指の使い方に注目した分析は、著者が土器づくりの習得をすすめていく過程で、職人一人ひとりが自分の作り方の独自性を主張して、常に独自の手指の使い方に従って土器を作っていること、さらにその順番でなければ土器を完成することができない場面に遭遇した経験をもとにおこなったものである (p. 76)」と説明されている。具体的には「両手親指第1関節の腹を前後に動かす」とか「人差し指第1, 2関節の側面を反時計回りに動かす」といった微細なプロセスの記述で、合計20種類が区別されている。この「指使い」のいくつかをまとめたものが「工程単位」とされ、これらの概念を用いて、さまざまな土器の成形過程と、職人によるその違いが詳細に論じられる。

ここで読者は、エティック／イーミックの議論を想起するかもしれない。つまり、「指使い」は女性職人たち自身が認識し、言語化している単位なのか、それとも著者が分析のために持ち込んだ切り分けなのか、という疑問である。それについて著者は、「職人は、著者が分類した『指使い』を命名しているわけではない (p. 77)」が、しかし「彼女たちは、その『指使い』以外の方法で土器を成形することはない (p. 77)」と記している。また「工程単位」については、「職人による土

器づくりに関する動作名の命名の仕方によりそった（よりイーミックな）カテゴリー（p. 272）」であるとのことである。本書ではこのような形で、分析の利便性とイーミックな意味との折り合いがつけられているのである。

この「指使い」「工程単位」という概念を用いて、職人たちそれぞれの土器の成形を学んでいく様子が「テクノ・ライフヒストリー」という形で縦横に語られている。そこで明らかになるのは、ある程度規格化・共有化されてはいるが、しかし職人個人によって微妙に違ってくる土器作りのプロセスである。地域によって性質の違う粘土を使い、手捻りで成形し、野焼きをするというその過程では、どうしても体系化して語ることでできない微妙な差異が生じてくるのである。結婚前には大きな土器を立派に作る事ができたが、結婚して違う土地に移ってから、作る土器がなぜか壊れ続け、けっきょく小さな土器しか作らなくなった女性ダブリトの話（pp. 145-149）は、ほろ苦く胸に迫ってくる。そのような難しさをよく理解させてくれる事例である。

そういった状況を語る時、本書に頻出するのが「アーニ」と「マルキ」というアリ語である。「アーニ」とは第一義的には「手」を意味するが、著者によると「アーニは、日本語の『手』と同様に多義的につかわれており、『手は知った（つくり方をおぼえた）』『手がよい（壊れずにつくる）』など調査中に少なくとも七つの用例を確認した（p. 88）」とのことである。つまり手の延長としての、土器作りの身体技法全体に対して用い

られる言葉だといえるだろう。この点については「彼女たちは、評判のよい職人のつくり方を真似しても、そこには個々の職人の身体にはじめから埋め込まれているような個性が存在しており、それぞれの身体をそのつくり方に単純にあわせるのが不可能であることを『アーニ』という言葉で表現しているのである（p. 246）」と書かれている。

また「マルキ」とは、第一義的には家畜、農作物、道具などの「種類」のことだが、「マルキがある、ない」という形で、人の手によって製作されたものを評価するとき用いられる。「マルキのある土器」とは、たんに規格に合致した土器というのではなく、「仮に職人が破格なサイズの土器をつくってしまったも、それがだれかの具体的かつ個別の状況や場面に適切なサイズであれば、その人にはマルキのある土器として評価され受け入れられていた（pp. 57-58）」。

このような形で「絶えず変化する関係の網の目のなかで、職人が素材に対して毎回異なるはたらきかけをすることによって成立している一回性の営み（p. 244）」は、土器作りを「文脈化」したときに実践されていると著者は論じている。「マルキ」は、そういった文脈化を語るためのキーワードとなっているのである。「マルキ」にせよ「アーニ」にせよ、土器職人たちの身体技法に根ざした、日本語にむかひに訳しがたい深い広がりをもっている。読後、私の心にいちばん残ったのはこれらの言葉であった。

以上述べてきたように、本書は身体を用いた物作りという、重要なことは明らかだが言

語化，記述が困難であった分野に挑戦した記録であり，そこから新たな方法論と成果が生まれ出されている。また，掲載されている写真も，職人たちの仕事ぶりを生き生きと示す，見ていて楽しいものだということを付けくわえておきたい。

最後にすこし問題点を指摘しておこう。まず残念なのは，せっかくおこなった著者自身による土器作りの体験が，具体的な記述としてほとんど盛り込まれてなかった点である。もし書けるものなら，今後ぜひ論文化して行ってほしい。もうひとつ思ったのは，出版の予定が急であったのだろうか，どうもあわてて書いて練り切れてないような部分が，全体の構成にも，また文章にも散見されるとい

う点である。些細な例だが，たとえば「キャベツ (p. 42)」と「ケール (p. 43)」はおそらく同じものだろうし，「イジャケン (p. 21)」と「イジャーケン (p. 87)」という個人名の記述も不統一がみられる。また，一般的な事象を論じるときにも，ほとんどの文末が「～た」「～た」「～た」といった形で過去形になっている部分が多く（たしかに観察自体は過去にしたものなのだが），若干の読みにくさを感じた。

しかしこれらの問題点は，本書の意義をそこなうものではもちろんない。「身体を使う」ことに関わる人類学に関心をもつすべての人に読んでいただきたい一冊である。